



# ンボモ村便り



コンゴ共和国オザラ・コクア国立公園のンボモ村より

第5回

萩原幹子 (JWCS プロジェクトスタッフ)  
2024年3月



## 1. マルミミソウの畑荒らし防御柵

(公益信託地球環境日本基金助成)

公園管理当局が設置した、村を中心に5キロメートル四方を囲む電気柵の通電が昨年10月から始まりました。柵の中にはまだゾウが数頭残っていたり、道路にある扉からゾウが入ってきたりしたもの、電線にゾウが触れた記録もあり、柵の中は通電前に比べゾウの存在はほとんどなくなりました。柵の中の畑主たちはそれ以来やっと、畑の見張りから解放され自宅に戻って寝られるようになりました。また柵の内側で新たに畑を開墾する人が増えました。

一方、柵の外では11月、12月と畑荒らし被害が特定のエリアに集中し、このプロジェクトの資金でできる限り廃油と唐辛子を用いた柵で囲みました。そのほか柵外の小さな村落ではもう住めないほど、家の周りまで被害が起きたところもあります。本助成は3月で終わりますので、公園当局が柵の外の畑について対策を取ってくれることを願っています。



電気柵が横切る道路にある扉、開いたら閉じるよう徹底が必要



ゾウに倒されたババイヤの木

## 2. 若者による野生動物と共存する村づくり

(プロ・ナトゥーラ・ファンド第8期協力型助成)

養蜂教室の実習として、8月の分蜂シーズンに、女王蜂を巣箱に取り込む試みを学びました。ハチの動きが鈍る大雨季を経て、2月にはすでに群れが安定していた3つの巣箱をまとめて設置する「蜂場」に移動します。ハチが巣箱に入る夜間、8名の受講生が移動作業に参加しました。その巣箱の上にもう一段乗せた箱の中に貯められる蜜が、収穫できる蜂蜜です。収穫まで学びのステップが残っていますが、4月からはクラウドファンディングの資金により、最後の段階まで学ぶことができそうです。また講師と受講生15人が養蜂家の集まりとして「Friends of bees for conservation (自然保護のための蜂の友)」という名で組織化したのは嬉しいニュースです。生産者のグループを作ると、国の農業政策として支出される補助金を申請できるようになるからです。



これまでの活動はウェブサイトに掲載しています。



木の枝に一時滞在する蜂の群れから女王蜂を探す実習



人気の無い場所に設置した蜂場